

## 出会うワゴン (後期)

今月のテーマは、「冬」です。

『美しい日本語の風景』 中西進

美しい言葉に心惹かれたことがある、という経験は誰にでもあると思う。例えば「ふゆ」。この本によると、「ふゆ」という言葉は震えるという意味の古語で、寒いと体が「ふゆ」ことから現代の「冬」ができたそうだ。

風景から言葉織りなすのも良いが、言葉から風景を見てもみるのもまた、素敵かもしれない。

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』

村上春樹

言わずと知れた小説家、村上春樹からの一冊。彼の小説の中では分量的にも内容的にも、比較的読みやすいと思う。「大学二年生の七月から、翌年の一月にかけて、多崎つくるとはほとんど死ぬことだけを考えて生きていた」の一文から始まる多崎つくるとの巡礼は、多くの登場人物の心情が多重構造的に入り組んでいる。個人的に一番好きなのは主人公がフィンランドに赴いた先で言われた、「君にはそれだけの力が具わっている。だって夜の冷たい海を一人で泳ぎ切れたんだから」という言葉。もちろん日本からフィンランドまで泳いだとかいう話ではなく、とても奥が深い言葉です。この言葉が少しでも気になってくれた方は、ぜひ手に取って読んでみてください。

『江戸川乱歩』 江戸川乱歩

江戸川乱歩の代表作「屋根裏の散歩者」「人間椅子」などをはじめとした二二作品の短編が集められた満足感のある一冊です。読みやすく面白いですのでぜひ手に取ってみてください。



## 第8回「ミセン」ブックバトルに参加して

私は、松山市立中央図書館主催の第8回「ミセン」ブックバトルに参加しました。ずっと参加したいと思っていたブックバトルですが、「コロナ禍の影響もあり、なかなか参加することもできず、今回念願の初参加となりました。ブックバトルとは知的書評合戦とも呼ばれ、自分が紹介したい本を持ち寄り、制限時間の中で、本の紹介と質疑応答を通して、聴衆が最も読みたいと思った本に投票し、チャンプ本を決めるというものです。本好きからするとたまりませんよね。聞くだけでワクワクしてしまいます。今回私が紹介した本は『ダチヨウはアホだが役に立つ』です。担任に勧められて沼にハマってしまった本です。作者の塚本康浩さんがケレッキシの関西弁なこともあり、スピーディーに読むことができます。是非手に取ってみてください。またブックバトルに参加することで、他の学校の方の発表を聞き、知らなかった本に出会うこともでき、とても良い刺激になりました。奮闘の結果、昨年の先輩に続き、2年連続で西校生がチャンプに選ばれました。自身の選んだ本に聴衆の皆さんが読みたいと興味を持ってくださったことに今までにない感動を覚え、貴重な体験となりました。このブックバトルについては、12月の中央図書館入口にて紹介・展示されています。大々的に紹介されていますので興味を持った方は是非見に行ってみてください。

『ダチヨウはアホだが役に立つ』

『ダチヨウ博士の人畜無害のすゝめ』

京都府立大学学長 塚本康浩 著



## 新刊紹介 (新書)

- 『最澄と徳一』 師 茂樹
- 『スペイン史10講』 立石博高
- 『ユーゴスラヴィア現代史 新版』 柴 宜弘
- 『ピトラ』 芝 健介
- 『ネルソン・マンデラ』 堀内隆行
- 『日韓関係史』 木宮正史
- 『異文化コミュニケーション学』 鳥飼玖美子
- 『シヨブ型雇用社会とは何か』 濱口桂一郎
- 『新型コロナと向き合う』 横倉義武
- 『法医学者の使命』 吉田謙一
- 『知的文章入門』 黒木登志夫
- 『万葉集に出会う』 大谷雅夫
- 『大岡信』 大井浩一
- 『〈弱さ〉を〈強み〉』 天畠大輔
- 『岸田ビジョン』 岸田文雄
- 『ジャーナリズムの役割は空気を壊すこと』 森達也
- 『中国「見えない侵略」を可視化する』 読売新聞取材班
- 『ルポ森のようちえん』 おおたとしまさ
- 『あなたを救う培養幹細胞治療』 辻 晋作
- 『国境なき助産師が行く』 小島穂奈
- 『勉強の価値』 森 博嗣
- 『はじめての機械学習』 田口義弘
- 『多様体とは何か』 小笠英志
- 『爆発する宇宙』 戸谷友則
- 『俳句のきた道』 藤田真一
- 『A-の時代を生きる』 美馬のゆり

(四年)

冬期休業中の開館日・開館時間

12月22日(水)〜28日(火) 土日除く

8時30分〜16時50分まで

新年は始業式の日から開館します。

(五年)

(六年)

出会いのワゴン (前期)



今回の出会いのワゴンのテーマは、「絵本」です。絵に惹かれて手に取り読んでみると、意外と内容が濃い…なんて新鮮な出会いがあるかも。

『ねじほすっぱ』 石津ちひろ

かわいいねこのゆかいなクスツと笑えるような生活が、面白おかしく描かれています。癒しを求めているのであれば、是非この本を手にとってみてください。

『ねえさんの青いヒジャブ』

イスラム教徒の女性が髪を覆うスカーフ、ヒジャブ。姉の青いヒジャブに憧れる少女は、周囲の偏見の目を受け止めつつも、多様な価値観の大切さを知っていく。様々な違う価値観や文化の中で一歩前へ出る勇気を学べる。

乙女の本棚シリーズ

人気イラストレーターと古典の異色「ラポ

『瓶詰地獄』夢野久作十ホノシロトフジ

浜辺に流れ着いた3通の手紙。そこには、遭難した兄弟の無人島での生活が綴られていた。第一の瓶、第二の瓶、第三の瓶…読んでいく程に悲しくなっていく…

『夢十夜』夏目漱石十しきみ

夏目漱石の「こんな夢をみた」という実験から編集された淡くて儂い十の夢。金魚を眺めたり、夫の帰りを待ったり…それとも至上善良な正直者？あなたはどんな夢を見たいですか…。

(三年)

本を楽しく読むために

皆さんは今年何冊本を読みましたか？私はたくさん本を読みました。今回のエッセイでは私なりの本の選び方を紹介します。一冊の本を読み通すにはまず自分に合った本を選ばなければいけませんよね？本を選ぶときに表紙を見て選ぶ人も多いと思いますが、表紙だけでは読み始めてから「合わないな」と感じることも多いかもしれません。そして読むのをあきらめてしまうかもしれません。では私はどうしているかというと、本を選ぶ際、本の始めと終わりの数ページを読んでみるのです。これで、大きく外れることなく上手に本を選ぶことができます。終わりの数ページを読んでいることで結論を知ることができているからだと思います。そして、この読み方だとあまり手に取らないジャンルの本でも、「概要」がつかめて内容が理解しやすくなり、読まれると思えます。

今年もあとわずかですが、1冊でも多くの本と出会い、読めるといいですね。図書館の本は今借りると、1月7日営業式まで借られます。

いつもより長い間借りられますので、この機会に図書館を利用してほしいと思います。



(二年)

新刊紹介

- 『硝子の塔の殺人』 知念未希人
- 『みとりね』 有川 ひろ
- 『デューン 砂の惑星 上・中・下』 星野 源
- 『働く男』 織守きょう夜
- 『花束は毒』 伊吹 有喜
- 『雲を紡ぐ』 宮崎 徹
- 『猫が30歳まで生きる』 劉 次欣
- 『三体 ⅠⅡⅢ』 高山なおみ
- 『じぶんのころころとまぐ付き合う方法』 不思議なお菓子サイエンススイーツ
- 『自炊。何じょうか』 森 博嗣
- 『ぼくはイエローでホワイトでちっとブルー』 遠藤 嘉基
- 『世界中の女子が読んだ！体と性の教科書』 谷川俊太郎
- 『あきらめの価値』 伊与原 新
- 『トットちゃんと訪ねた子どもたち』 青柳 碧人
- 『現代文解釈の基礎 新訂版』 共同通信
- 『本当の翻訳の話をしよう増補版』 黒川 祥子
- 『さよならは仮のことは』 黒川 祥子
- 『月まで三キロ』 黒川 祥子
- 『むかしむかしあるところに、』 黒川 祥子
- 『やっぱり死体がありました。』 黒川 祥子
- 『令和の皇室』 黒川 祥子
- 『8050問題』 黒川 祥子
- 『理科がもっとおもしろくなるScratchと科学実験』 黒川 祥子
- 『岸壁採集』 鈴木香里武
- 『育良クリニックの軌跡』 浦野 晴美
- 『自分の薬を作る』 坂口 恭平
- 『死体格差』 山田 敏弘
- 『りんごだんだん』 小川 忠弘
- 『みんなとおなじくできないよ』湯浅 正太



(一年)

編集後記

キリスト教が他宗教から取り入れ、祝祭となっている「クリスマス」という文化がある。(賀来周一著『サンタクロースの謎』参考)日本では、明治時代に広まったとされているが、キリスト教の祝典というより、イベントとして親しまれている。

しかし、クリスマスを否定的に考える人が、主に二通り存在する。

一つ目は、「クリスマス本来の形とは違っている点を、否定的に考える人」である。確かに、キリスト教の祝祭としてのクリスマスと、日本のクリスマスは異なっている。しかし、キリスト教そのものも、クリスマスを変化させることによって取り入れた。よって、その点を否定する必要はないと考えられる。

二つ目は、「クリスマスを恋人と過ごす人に対して、嫉妬をしている人」である。他人を嫉んだところで、自分自身は変わらないし、人の幸せを願うことが不運を願う人には、はたして幸せなどやってくるのだろうか。

「嫉妬心を持った時は、嫉妬を羨望に変える」「ことや、何事も肯定的に捉える」ことが大切である。そうすることで、このようなイベントをより楽しめるのではないだろうか。

(委員長)

